

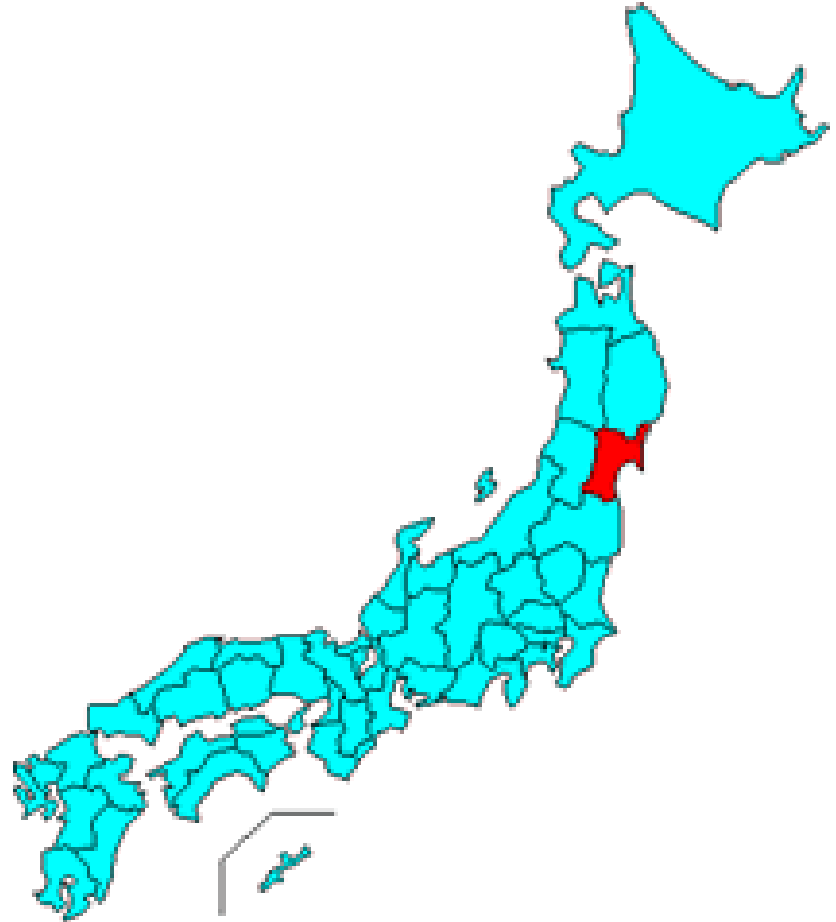
# 東日本大震災（宮城県・福島県）

専門家チーム視察報告2011/4/6~2011/4/13

## 目的

- ①発達障害児者、保護者らの支援ニーズ調査
- ②支援学校、児童デイサービスら、発達障害児者の周囲の関係者の支援ニーズ調査と支援サービスの現状把握
- ③各支援団体の連携構築と、今後の支援計画作成

# 宮城県の様況



# 震災時の発達障害の子どもたちの様子1

## ①地震に対する反応

- ⇒乳幼児期の子どもの中には意外と落ち着いていた子どもも多い。
- ⇒年齢が高い子どもは余震の度に、敏感に反応する子どもが多い。
- ⇒地震を恐れて家から出られなくなった。
- ⇒地震を恐れ子どもが眠れず、夜通し車を走らせざるを得なかった。

## ②環境変化に対する反応

- ⇒揺れよりも、家の中の家具が倒れて、部屋の様子が変わったことに対してパニックとなる。
- ⇒停電により、生活リズムが変わってしまった(いつもの、TV番組が見れなくなった/ゲームができなくなった)。

# 震災に対する

## 知的障害・発達障害の子どもたちの様子2

### ③避難所での反応

⇒もともと地域で子どものことを理解してもらえている人が多い場合は、何とか過ごせている。

⇒避難所に入れない子どももいる。

◎避難所で生活する発達障害の子どもは少ない。

⇒避難所にいる場合、日中、夜中に泣き叫ぶことがあり、当人・家族も他の避難所で生活している方も困っている状況が見られた。

・保護者が家で過ごすことを選択する。

・家が流されている家庭は、親戚などを頼って他市、他県に移住している。

**★シェルターなど、発達障害児者らのための避難所が必要。**

# 知的障害・発達障害児者の保護者の声1

- ①災害時の支援を求められる連絡先が分からない。  
⇒情報は提供されていても、情報は整理できていない。  
⇒今回の震災のように、通信手段が使えないときにはどうしたらよいのか？  
⇒必要な情報が必要な人に、行き渡っていない。

- ②療育手帳などの普段の支援サービス受給に関する証明書が何も生かせない。  
⇒発達障害の子どもは、買い出しで、長時間並べない。  
療育手帳があれば、優先的に買い物できる権利などがあれば…。

# 知的障害・発達障害児者の保護者の声2

## ③常用薬の確保について

⇒どこのクリニックが開いているのかわからない。

## ④ガソリン不足

⇒デイサービスや買い出しに行けない。

⇒徒歩圏内の支援場所がほしい。

## ⑤衛生面について

⇒トイレ、お風呂の問題。

⇒おむつなどが入手困難になった。

## ⑥避難所に居られない

⇒ドアからパニック。親戚の家でも不安定。慣れない。

# 知的障害・発達障害児者の保護者の声3

⑥食料不足。

⇒アレルギーがあったり、偏食があったりする子どもを持つ親にとって、非常に困難な状況になる

⑦家の中に閉じこもりになる。

⇒母子ともにストレスフルな状態。

⇒連れて行くにもガソリンがない。

⑧実家・親戚の家が被災していても、子どもを預けるところがないので、助けに行けない。

# 震災直後の保護者の声：まとめ

●ガソリン、食料確保、薬の確保など、障害をもつ子どもの家族はそういった資源の獲得にも一層の工夫が必要であり、家族の疲弊も大きなものとなる。  
⇒一般家庭と必要品は同じでも、手にするまでのプロセスに苦労が存在する。

●デイサービスやレスパイト、ショートステイなど、早期の生活支援サービスの再開が、家族の日常を取り戻すためには必要。

●災害時の情報ネットワークの再整備の必要性



# 施設の現状のまとめ1

①施設自体が津波で流されてなくなっている。

⇒職員・施設が無事でも、職員が自分の生活を立て直すことが優先で施設を再開できていないところもある。

⇒別の場所で再開できているところもある。

⇒ライフラインが復旧していない段階。

★それまでの各個人の支援情報の一切が失われている施設が多い。支援の継続性が途切れる！

②施設再開・継続していくための物品が不足している。

⇒粘土、お絵描きセットなどの文具類

⇒子ども用の机、椅子。

⇒一人で過ごせるためのおもちゃなど。

⇒自転車(高校生)

⇒個人特性向けの支援ツール。イヤーマフ、ドーム型テントなど。

## 施設の現状のまとめ2

③利用者の生活環境の違い。

⇒避難所から通う。自宅から通う。

⇒自宅が津波被害で、親戚などのところに移り住んでいる。

④利用者の安否確認、人手不足

⇒利用者の安否確認中で、施設サービスに人を投入できない。

⇒再開するだけでぎりぎりの段階。レスパイト対応の人手不足。

⇒勤務状況により職員のストレスも限界に近づいている

⑤一方で、施設の再開や今後の見通しについて、支援ニーズは低く自立しているところと、支援ニーズが高いところなど、地域だけでなく、施設や団体によっても支援ニーズに差異がある。

⇒今後外部からの支援基盤を構築する際には、綿密なアセスメントが必要。さらに、復興速度と相俟って、刻々とニーズが変遷している。今日必要なことが、明日はいらないこともある。

# 宮城県での支援に向けて

●家族がいつもの日常を取り戻すことが大きな支援となる。

⇒児童デイ、ショートステイなどの早期の再開が必要。

⇒(社福)石巻祥心会かもめ学園(児童デイ)から専門家やマンパワー支援の強いニーズが要請される。

●「知的障害・発達障害関係団体災害対策連絡協議会」での連携を支援のプラットフォームとして位置づける。

⇒生活支援サービスの再開によって、家族が家の片づけなど、復興に力を注げることにつながる。

⇒生活支援には福祉施設支援が効果的である

## 宮城県での支援に向けて2

- JDD-Netとして、石巻地区を中心的な支援の場とする。  
⇒かもめ学園からの支援ニーズの要請が高いだけでなく、  
現地の福祉的基盤が脆弱な背景もある。  
⇒今回の支援を生かして、もともとの基盤の再整備につ  
ながれば…。
- 綿密な支援ニーズの分析を踏まえて、専門家やボラン  
ティアの派遣を検討する。  
⇒かもめ学園からは子どもの発達アセスメントの依頼が  
ある。  
⇒中長期的な視点が必要。いずれは現地職員に引き継  
いでいく流れを大切にする。

# 宮城県での支援に向けて3:課題

●現地の支援ニーズは時期が遅くなるにつれて、減少することが予想されると同時に、支援ニーズの変化も刻々と変化する。

⇒即応性の対応が必要なため、つなぷろ(ボランティアを使って避難所などの支援ニーズを調査し、専門家につなげるチーム)と協力・連携して避難所などのニーズに対応することも検討が必要

●中長期的な視点に立つと、現地の施設関係者、専門家や協力者との連携・協力が不可欠になると思われる。

# 福島県の現状



# 福島原発にともなう避難の経緯

- 3月11日...東北地方太平洋沖地震発生
- 3月11日...第一原発半径10キロ避難指示
- 3月12日...避難地域を半径20および  
第二原発半径10キロメートル避難指示
- 3月15日...屋内退避地域の設定
- 4月11日...計画的避難区域の設定

- 準備期間のない突然の避難。先の見通しの無さ。
- 避難先から次の避難先に転々とうつる状況。
- 役場機能の分散、情報管理の限界。
- 自治体による対処の差。

# 避難地域に重なる入所施設

- もともとこの避難地域には入所施設は多い。
- 1960年代より。当初は児童対象からそのまま成人対象に。
- 入所施設に関しては、集団避難が完了しているところが多い。
- 施設協会からの報告から「避難所での障害者ゼロ」。



# 福島県避難地域北部の現状

- **公的機関ハード面の現状（4/11現在）**
  - 30キロ圏内では、学校・幼稚園・保育園が開かれていない。
  - 20～30キロ圏内は自主避難という形である。
  - 30キロ圏内の子どもは区域外就学になる
  - 避難地域の養護学校が移転。サテライト型で運営を始めた養護学校もある
  - 自閉症の子は環境が変わるのが不安で、転校先を決められない状況。区域外就学はやはり難しい。
  - 送迎も圏外のバスが30キロ圏内に入れず、手前でピックアップする感じ。送迎は親頼み。

# 福島県海岸部地域北部の現状

## • 事業所の現状

- 30キロ圏内では、外出禁止だから各事業所は訪問支援をしないでください、という暗黙の了解。
- 児童デイサービスの数が少ない
- 職員もバラバラになった状況、家庭の状況等でコンタクトできない現状。
- 行政では高齢者の方が優先され、障害のある子どもへの支援は後回しになりがち。

# 福島県海岸部地域北部の現状

## • 自閉症の子どもたちの様子

- 一日中、放射線という言葉を探る。
- 放射能が怖くて押し入れから出てこない
- オムツが必要になるなどの退行
- やたら食に走る。食べる以外に楽しみやエネルギーのやり場がないからか。
- お気に入りのドライブができないことで、フラストレーションがたまる。
- やることがなくてパニックになっている

# 福島県避難地域南西部

- 入所施設は施設ごと移動するケース多い。
- 4/11現在ではライフラインが問題のところもあり、事業者が事業を開けない。
- 小規模の公民館から、アリーナのような大規模な施設に集約されていくことが多い。となると、細やかな支援・配慮がしにくくなる。
- 精神障害者にちょっとした配慮が行き届かず、居づらくなる場合も。

# 福島県避難地域南西部

## • 自閉症の子どもたちの様子

- 食べ物・メーカーへのこだわりが強かった子が、物資の欠乏で(こだわりの品物が手に入らず)パニック頻発。
- 生活リズムが崩れ、布団にこもっている時間が長くなる。
- 余震がくると、避難訓練のパターンにはまり繰り返す例。
- 親さんからは、良くしてしてくれたという反応を聞く例も多い。

# 福島県避難地域南西部

- **学校等公的機関の現状**

- 避難してきた子どもたちの情報が不足している。
- 年度初めの打ち合わせができていない
- 一般生徒に対するカウンセリングの開始
- 学校の引っ越しにともなう移動支援の調整

- **近隣事業者の抱える現状**

- 避難してきた人というよりも、普段生活している人が通常のサービスが受けられない状態。
- 避難所を出た後の情報共有で困っている。
- 年度末の引き継ぎが中途半端なままである
- 現在は受給枠等の手続きを後にして、事業所の持ち出しでしている状態。
- 住民票の問題。

# 受け入れ先となる“中通り地区”の避難所の現状

## •避難所A

- 避難者向けのイベントが極めて充実。
- 身体・衛生面での配慮は良好。
- 子ども向け物資(絵本・色鉛筆・お菓子・遊び道具)等も充実
- 子どもの相談をきっかけに、親がストレスを出されること多い。
- いつ帰れるかの見通しが立たないことへのストレスは極めて大きい。
- 小児科Drによる何でも相談の実施

## •避難所B

- 個室が豊富にある。乳幼児期の家族、要介護老人等は個室利用。
- 利用者の満足度は高い。いまは利用者は減り、2次避難に移行。
- 特別支援に行っている子は現在2名。

## •避難所C

- 個室, スタッフの充実。
  - 流動的に避難所を移動している人が多い。1次避難から2次避難へ。
- 個室などは、発達障害児者の避難場所に向いている。優先的な割り振りなどは今後の可能性。

# 受け入れ先となる“中通り地区”の避難所の現状

## • 避難所D

- 約2000名の避難者が生活
- 個人スペースなどは段ボールなどで仕切られている。
- 二つの町役場機能も臨時開設されている。
- ノロウイルスが発生するなど、衛生面等で気になる。
- キッズコーナーを設置。
- キッズコーナーの近くで、NPO法人などが保護者の相談・支援を行っている。
- 保護者と離れる不安などで学校に通っていない子どもも少なからず見かけられる。
- 学生ボランティアの子どもに対する対応が統一されておらず、危険な場合もある→専門家の助言が必要



# 今後避難先となる会津地区の現状

- **避難所からのニーズの汲み取りについて**
  - 避難してきた自治体(原発のある町)は役場機能の修復、情報の収集で精いっぱい。障害者の支援まで手が回らない。
  - 声が上がってくれば事業者としては動ける。  
→逆に声が上がらない限り支援者は動けない。
- **支援のための方向性**
  - 事業所利用にむけたパンフレットの作成。
  - パンフレット配布とともに、様々なアプローチでの支援ニーズの発見を行う

# 福島県の支援の課題

- 避難の今後が予想できず，特に相双地区の子どもたちは今後どこにいくかがわからない
- 現状出来ることは，今後の支援のための個別の支援計画の基となる発達アセスメントを提供していくこととなる
- 石巻で開発した発達アセスメントの様式にそって福島県の4箇所，親の会が設定した相談の場所において，派遣された専門家が発達アセスメントを行っていく。6月以降毎週数日ずつが予想される

# JDDとしての被災地支援

## 「いつもの日常を取り戻すために /新しい日常を創り出すために」

- 大震災は、子どもたちの日常を奪っていく。
- JDDNETとしては、子どもたちの日常を取り戻すために、日常的な発達支援が機能できるための取り組みを行っていく。
- 個別の支援計画のための発達アセスメント様式を現地でのニーズを聞きつつ、5月7－13日の専門家チーム第2陣が作成し、その普及のための講習を各地で行う。
- 6月以降に、宮城県(石巻を拠点)、福島県で、現地の児童デイや親の会などの設定した場所で実際の支援を行っていく。
- 今後は変わっていく現地のニーズに対応して支援を構成していく。

# 必要な準備

- 財務：JDDNET東日本大震災基金および日本財団などの助成金を活用する。基金のための募金の呼びかけが必要。
- JDDNET加盟の職能団体を中心に、6月以降での専門家の派遣計画と、派遣のための講習会のスケジュールの確定が必要である。
- 物資：支援に必要な物資を必要に応じて集めることが必要である。現状、自転車30台・IPOD100台(気仙沼特別支援学校より)、紙芝居・絵本・おもちゃ・就学前児童への教材・教具類(指先を使う遊びや絵カード含む)、そこでクッションチェア(株式会社無限工房製のようなもの)1台・クッションマット(ジョイント式等で10m<sup>2</sup>程度のサイズ)数個・キーボード、ラジカセ(かもめ学園)。や絵カード含む)、そこでクッションチェア(株式会社無限工房製のようなもの)1台・クッションマット(ジョイント式等で10m<sup>2</sup>程度のサイズ)数個・キーボード、ラジカセ(かもめ学園)。